

教職課程コアカリキュラム案に関する意見

2017年6月22日

日本教育心理学会

理事長 小野瀬雅人

意見 1

論点：事項「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」の各到達目標について

本事項の内容については、現在まで日本教育心理学会を含む心理学関連の諸学会においても、基礎的内容から学校教育現場での実践と深いつながりを持つ内容まで、幅広い研究が蓄積されてきているところです。教職課程においては、こうした研究の蓄積もふまえて、幼児、児童及び生徒の心身の発達過程、学習の過程について、単に専門用語、理論の要約等を呈示・説明するだけでなく、幅広く、かつ学校教育の現場とのつながりが可能になるだけの具体性を伴った形で教授されることが、これからの学校教育を担う教員の力量の基礎として必須になると考えます。

これに対して、現在提示されている到達目標は、きわめて多岐にわたるべき内容について、それを十分伝え得ない1語（「特徴」「あり方」）で示しているなど、他の事項における目標に比べても具体性が乏しく、必要な内容を伝え得ないものとなっていると考えます。そのため、本事項が幅広い内容にわたること、上で示したような具体性を伴う深い理解が必要であることが十分理解されないことを強く危惧いたします。

従いまして、別に意見としてお届けしますように、各目標について加筆を行い、その内容の広がり、教員の職務とのつながりが十分伝わる記述としていただきますよう要望いたします。なお、本事項が幅広い内容を扱うことを考えると、教職課程において十分な講義時間、具体的に申せば少なくとも2単位の履修が必要と考えられること、さらに、より深い理解を得るためには、発達の過程、学習の過程を別科目としてそれぞれ2単位程度の履修が必要と考えられることを申し添えます。

意見 2

論点：事項「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」における「幼児、児童及び生徒の心身の発達の過程」の到達目標1)について

本目標については、「心身の発達の概念及び関連要因」を具体的に提示し、本目標に関わる内容の広がりを明示する加筆を要望いたします。その理由については、当学会からの意見1をご参照下さい。

「心身の発達」にかかわっては、心理学においても、発達過程を説明する理論的考察の多くの蓄積があり、辞書的な意味で（「概念」として）「発達」を知るのではなく、その理論的説明を知ることが教育の基礎的理解として必須と考えます。また、「関連要因」をより

明確にすることで、発達概念と学校教育や幼児・児童・生徒の生活とのかかわりが明示できるものと考えます。その際、関連要因としては社会文化的な環境などいわば外的要因と、生物学的な意味での成長に関わる内的要因が考えられます。

以上のことから、本目標に十分な加筆を行い、例えば

「幼児、児童及び生徒の心身の発達概念、それに関する代表的諸理論の基礎、幼児、児童及び生徒を取り巻く外的及び内的要因との関連を含めて、教育における発達理解の意義を理解している。」

とすることを要望いたします。

意見 3

論点：事項「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」における「幼児、児童及び生徒の心身の発達の過程」の到達目標 2) について

本目標については、「運動、言語、認知、社会性などの特徴」とされている内容について、より具体的に提示し、本目標に関わる内容の広がりを見せ、学校教育との関連を明確化する加筆を要望いたします。その理由については、当学会からの意見 1 をご参照ください。

幼児、児童、生徒の心身の発達を教育と結び付けて理解するためには、その具体的な内容を知り、発達の支援また指導上の課題となりうる事柄を理解し、そこからその支援のあり方についても具体的に考察できることが必要と考えます。しかし、現在用いられている「特徴」という 1 語はそうした内容を十分伝達できません。また、「運動、言語、認知、社会性」という表現ではなく、「運動発達、言語発達、認知発達、社会性の発達」という形で、それぞれ発達の語を付すことが一般的と考えます。

以上のことから、本目標に十分な加筆を行い、必要なら目標を分割して、例えば

「乳幼児期から青年期の各時期における運動発達、言語発達、認知発達、社会性の発達について、その具体的な内容を理解している。」

「乳幼児期から青年期までの発達過程を踏まえ、各発達段階における発達の支援及び学習指導、生徒指導の上で課題となりうる内容と支援の基礎となる考え方を理解している。」

とすることを要望いたします。

意見 4

論点：事項「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」における「幼児、児童及び生徒の学習の過程」の到達目標 1) について

本目標については、「学習の概念及び形態」について、より具体的に提示することで、本目標に関わる内容の広がりを見せ、学校教育との関連を明確化する加筆を要望いたします。その理由については、当学会からの意見 1 をご参照ください。

心理学において、学習の過程を説明する理論は複数存在しそれぞれ研究が蓄積されております。また、それぞれの理論が学校教育場面を含む幼児、児童及び生徒の諸行動をどう

説明し、発達の支援や学習指導、生徒指導にどう貢献するかについても多くのことが分かっています。これに対して、現在用いられている「学習の概念及び形態」という表現は、こうした理論的・実践的内容を十分伝達できず、あたかも辞書的な「学習」の意味とその過程の簡単な要約を示せばよいかのような印象を与えます。

以上のことから、本目標について十分な加筆を行い、必要なら目標を分割して、例えば「学習の概念及びその過程を説明する理論（学習心理学の諸理論、認知心理学の諸理論等）の基礎を理解している。」

「学習に関する諸理論と、幼児、児童の発達の支援及び学習指導、生徒指導との関連を理解している。」

とすることを要望いたします。

意見 5

事項：「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」における「幼児、児童及び生徒の学習の過程」の到達目標 2）について

本目標については、「動機付け、集団づくり、学習評価のあり方」とされている内容について、より具体的に提示し、本目標に関わる内容の広がり进行を明示し、学校教育との関連を明確化する加筆を要望いたします。その理由については、当学会からの意見 1 をご参照ください。

本目標に示された動機づけ、集団づくり、学習評価はいずれも学校教育と深く、またそれぞれ固有な形で結びついており、様々な内容の研究が蓄積されています。しかしながら、本目標にある「あり方」の 1 語はそうした内容と教育との関連を十分表現していません。

以上のことから、本目標について十分な加筆を行い、必要なら目標を分割して、例えば「主体的学習を支える動機づけを説明する複数の理論、関連する諸要因を、発達の特徴と関連付けて理解している。」

「さまざまな集団づくりについて、その形成過程、意義及び支援のありかたを、発達の特徴と関連付けて理解している。」

「学習評価の目的と具体的な手法について理解している。」

とすることを要望いたします。

なお、現在の案にある「動機付け」については、心理学では「動機づけ」と表記するのが一般的ですので申し添えます。